

2011 年度秋季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会 発表要旨

第1室（B棟1F大会議室）

1925年の『ブブス先生』

池坂 麻記（言語社会専攻博士後期課程）

『ブブス先生』はアレクセイ・ファイコが書いた戯曲で、メイエルホリドが1925年1月29日にメイエルホリド劇場で上演した。

1920年代のメイエルホリドが演出した作品ではゴーゴリ作『査察官』が傑作とされ、多くの研究がなされている。一方、1926年の『ブブス先生』はメイエルホリド自身も失敗だったと発言するなど評価が低い。しかし、そこには音響効果や視覚効果の為に、歌舞伎やジャズの要素がふんだんに取り入れられ、新しい試みに満ちている。この当時、メイエルホリドは歌舞伎だけでなくカタカリや京劇にも目を向けていた。ビオメハニカやプレドゥイグラールという体操のような身体訓練の考えもこの頃である。こちらは良い側面として上記の『査察官』に繋がっていく。

メイエルホリドはそれまで、ベルギーのヴェルハーレンが書いた『曙』（1920）、フランスのマルチネ作『夜』をもとにした『大地は逆立つ』（1923）という話の筋ならば似たようなプロパガンダ劇を手掛けているが、どちらもソ連の作家でなかったことに批判を受けていた。この『ブブス先生』は念願のソ連の作家ファイコが書いた戯曲だが、メイエルホリドもファイコも公に不満を表明している。更に、敵の資本主義者たちの方が魅力的に見えてしまうという、前作で浴びた批判を払拭することはできなかった。こちらは、メイエルホリドがソ連政府と対立し、最終的には粛清されてしまう遠因ともとれるのではないだろうか。

今回の発表では、メイエルホリドがこの上演で取り入れた新しい試みの紹介と、どのような批判があったのかを報告したい。

Elizabeth Crane's "Betty the Zombie" – Life of the Undead in Reality TV

宮本 恵美（大阪大学外国語学部非常勤講師）

エリザベス・クレーンの短編集 *You Must Be This Happy to Enter* はポップカルチャー、クリシェ、現代人の抱える心の病や女性性などのテーマをブラックなユーモアとざっくりばらんな語り口調で描いている。本発表ではその中でも“Betty the Zombie”という短編に焦点を当て、先述の四つのポイント及び現代アメリカ文化におけるリアリティTVとゾンビの意味と位置付けを考察する。

“Betty the Zombie”ではよくあるアメリカの郊外でごく平凡な生活を営んでいた主人公ベティが突然ゾンビに噛まれることにより自身もゾンビとなり、その特異性を活かしてリアリティTVに出演する様子が描かれている。その番組はさまざまな悩みを抱える7名の女性がリゾート地の屋敷で共同生活をし、ライフスタイル・アドバイザーと呼ばれるカウンセラーの助けもときに借りながら各々の悩みを乗り越え、生まれ変わるまでの過程を視聴者に提供している。赤の他人同士が共同生活をする中、それぞれが抱えていた問題が表面化し、グループ・ダイナミクスにより一進一退しながら成長および変化してゆく、という構図はリアリティTVによく見られるクリシェである。本発表では、その中にさらにゾンビというやや使い古されたポップ・アイコンを投入することの効果を考える。また、主人公ベティが抱える問題は自身が **undead** として生と死の間で生きているということだけではなく、子供を持つことが出来なかった喪失感に端を発する浪費癖、母親に対して従順であるが故に夢を追い求められなかった苦しみなどがあり、それらの問題は時代を問わず多くの人々にとって身近なものではないだろうか。テレビ番組の組制作者側、つまりは権力者に搾取されながらも逆に彼らを利用してしまふベティの逞しさにも見られるクレーンの描く女性像についても触れたい。

Self-sung Lullaby—August Wilson の Gem of the Ocean における母の不在

江戸 智美（言語社会専攻博士前期課程）

20世紀アメリカ演劇界を代表する作家 August Wilson は、1945年にドイツ移民の父とアフリカン・アメリカンの母との間に生まれた。60年代の公民権運動とブラックナショナルリズムの高揚を背景に、Wilson は母の姓をとり、August Wilson と名乗る。同じ年、Wilson は Bessie Smith の blues を聞き、アフリカン・アメリカン独自の言葉へと目を開かれる。

Wilson 自身が、blues にインスパイアされたと述べていることもあり、多くの先行研究が、blues にアフリカンとしてのアイデンティティを求めるウィルソンの姿勢に注目し、blues が作品の主要な要素であると指摘している。しかし、Wilson が作品に描き、また用いた音楽は、狭義の blues に限られるわけではない。Wilson 作品中の音楽には、身体的に刻み込まれた音楽、つまり共同作業から生まれたワークソングのような音楽もあれば、親から子へ、ある世代から次の世代へと継承される音楽がある。

本発表は、Wilson の 20世紀サイクル劇のうち、舞台設定の時系列上で最初に位置する作品 Gem of the Ocean を取り上げる。本作品では、かつて母から教えられた歌を、自分で自分に歌うという場面が二回見られる。これが作品中に登場することのない母親の不在を前景化する。それは、さらにアフリカの不在でもあるだろう。子守唄には、一般的に考えられるような「眠らせうた」以外に、「遊ばせうた」や「恨み節」としての歌が存在する。Wilson が言及した子守唄は、階層化される前の社会で多くみられた「眠らせうた」であることを指摘し、それを手がかりに、作品中の共同体について考察する。

第2室 (A棟2F大会議室)

背景の異なる初対面者同士の会話にみられるコード・スイッチング —視覚障害者と派遣社員のケース・スタディー—

中原 京子 (言語文化専攻博士後期課程)

初対面同士がコミュニケーションを行う場合に相手に対してどのようなカテゴリーで自己を表示するかについての研究の枠組みの1つに、Goffman (1974) の提示したフッティングがある。代表的なフッティングには話し手が自己に言及する人称代名詞 (Lerner and Kitzinger 2007) があるが、フッティングを表すのは一人称代名詞に限らない。

本発表では、会話参加者間の相互行為によるコード・スイッチングがコミュニケーション機能を持つフッティングの1つであり、Cashman (2005) により議論された社会構造からくるコード・スイッチングではないことを提示したい。

会話協力者は、初対面の30代の母親という共通項を持つ以外は背景の異なる視覚障害者と派遣社員の日本語話者で、前者は愛知県出身で後者は関西圏の出身である。15分間の自然会話を録音収集し文字化し資料とした。分析は談話分析の手法で行なった。

コード・スイッチングは、普通体と丁寧体以外に、丁寧体と「タメロ」と言われる仲間内で通用する言葉遣いととのコード・スイッチング、大阪弁と標準語とのコード・スイッチングがみられた。大阪弁と標準語については、1つの発話中に複雑に入り交じっていることから、Li Wei ら (2005) の bilingual, bidialect 分析の枠組みに従い、スタイルの切り替えではなくコード・スイッチングとした。

分析の結果、コード・スイッチングは相互行為におけるあいづち、アコモデーション、同意表示の機能を担うほか、相互行為と独立してコンテキストの中で話し手のモダリティを表示する機能があることがわかった。これはミクロな視点から見ると、社会構造からくるものとは別個に、個人間の相互行為および個人のモダリティに依存するフッティングが存在することを示唆している。

学習支援システム—WebCT の導入

—第二外国語としての中国語の授業を例に—

嚴 馥 (大阪大学外国語学部非常勤講師)

本発表の目的は学習支援システム—WebCT を授業に活用することについて検討することである。パソコンの時代に生まれた学習者にとって、学習の様式は「紙」だけではない。「紙面」から「パソコンの画面」に次第に変わりつつある。こんな中、本学は学習支援システム—WebCT を全学に導入している。この学習支援システムを、中国語教育に活用する意味があるかについて検討していきたい。研究の対象は中国語を第二外国語とする中級レベルの学習者である。1人を除き、みんな初級の段階で WebCT に接した経験がある。初級の段階では WebCT を「課題」という形式で「復習」に導入したが、中級の授業では、「課

題」という形式に変わりがないが、「予習」と「復習」の両方に導入した。予習の課題については、本文の内容を精読した上で、3つ以上の質問文を作成させた。課題は全て中国語で提出することを要求し、そして、課題に締め切りを設定した。授業の前に課題を提出しないと作成ができなくなる。また、公開の機能も設定した。授業の進行に間に合わせるために、学習者が予習の課題を提出した後、すぐ添削して WebCT を通して返送した。返送されたものは自分の添削の内容だけではなく、他の学習者の添削の内容も見られる。一方、「復習」の課題は本文の内容のまとめであり、設定は予習と同様である。今学期の最後に学習者にアンケートを行った。学習者のフィードバックは WebCT の導入に賛成する意見が大多数であった。具体的にいうと、中国語での提出は入力の良い練習だし、発音を覚える練習にもなった。締め切りの設定は中国語への学習意識の向上につながった。公開の機能により他の学習者の学習内容が見られることで自分の勉強に役に立った。しかしながら、WebCT の故障やパソコンの立ち上げの面倒臭さ等少数のマイナスの意見もあった。

国際理解教育の展開に影響する要因の日中比較検討

潘 英峰（言語文化専攻博士後期課程）

国際化の加速的な進展に伴い、各国の多文化化が加速度的に進展し、地域と学校の多文化化まで拡張されている。2010 年現在日本の外国人生徒数は 28511 で、その内、中国人中学生数が 2407 人で最も多い数となった。一方、中国の外国人生徒数も毎年 55% の比率で急激的に増加している。こういった状況の中で、日本の学校において国際理解教育を盛んに行っており、理論的・実践的研究も積み重ねている一方である。そして、中国の学校教育においても国際理解教育を重視しはじめ、都市によって違った国際理解教育の試みを積極的に取り組んでいる。しかし、「一衣帯水」の日中中学校において、国際理解教育の展開に其々どのような特徴があるのか、その展開に影響する要因は何かについて未だ検討されていない。以上を踏まえ、本発表では日本と中国の公立中学校で実施している国際理解教育の展開に影響する要因について検討した。

調査は主に日本と中国の公立中学校で行った。関連する日中の教育委員会と学校の先生に 10 人ずつインタビュー調査のほか、日本の中学校における参与観察も実施した。調査の結果、日中の中学校における国際理解教育の展開に影響する要因を具体的に、1) 直面する問題を解決する糸口であること、2) グローバル時代に適応できる国際人の育成であること、3) 学校の権利者による国際理解に対するオープンな態度であること、4) 学校経営の特色教育項目であること、5) 異文化理解・接触に合理的且つ十分な時間と空間を学生に提供すること、という 5 つの項目にまとめることができる。本研究は日中両国の中学生生徒の国際理解と意識の把握に基礎を付け、両国の学校に在籍している外国人生徒のサポートシステムの策定にも一つのヒントを与えることができると考える。

日本語能力の違いによる促音の聴覚的特徴

—台湾人日本語学習者を対象に—

洪 心怡 (国立高雄第一科技大学応用日本語系)

本研究では、各学習段階での促音の聴覚的特徴を探索的に解明するため、台湾人日本語学習者を対象に促音知覚実験を行った。312名の学習者を日本語能力の違いによってL1~L5の5つのグループに分け、閉鎖持続時間(以下CD)、先行母音長、アクセント型及び後続子音種類の4つを変数に促音の知覚に及ぼす影響を日本語能力別によって検討した。その結果は以下の3点にまとめられる。(1) L3を境界に群間の促音知覚率の違いのもつ意味は示唆されるものの、CDがある程度短ければ、日本語能力別による差異が見られなくなることから、CDが主要因として促音の知覚に関与していることを示唆するものである。(2) 4つの変数がともに促音の知覚に影響を及ぼす音声的要因であるが、CDという要因のみが日本語能力の違いによる群間変動としては認められるため、CDが促音知覚の学習を進める上での手がかりとして提供される。(3) 日本語母語話者が示した判断境界値と比較すると、日本語能力の向上につれ、必ずしも日本語母語話者の心理的に存在している促音カテゴリーに近づくわけではないことが分かった。このことから、学習者にとって促音知覚の上達とは促音と判断するために必要な閉鎖持続時間が短くなるということだけであり、判断境界値が日本語母語話者のそれに近づくとは言えない。よって、そこから促音指導を取り入れる際には、正しい知覚目標の設定を行う必要があるという教育的示唆が得られた。

第3室 (A棟3F第1演習室)

南北朝鮮の新年の辞における敬語の使用法の分析

—国家指導者と国民の関係性の変容を中心に—

櫻木 一紀 (言語文化専攻博士後期課程)

本研究は韓国及び北朝鮮に於いて、国家指導者により生成されてきた歴代新年の辞における敬語使用の特徴を分析し、そこから得られたデータを基に言説生成を取り巻くコンテクストの変化により言説上に投影されている言説生成者と受容者の関係性がどの様に変容したのかを考察することを目的とする。

新年の辞とは最高政治指導者が自身が代表を務める政治共同体の構成員に対して新年を迎えたことに対する祝賀の意とともに昨年の成果とその評価、今年目標と方針などを発表する公式的なあいさつである。この行為は生成者が受容者に対して効率よく自身のメッセージを伝えるために様々な言語装置をコンテクストに合わせて戦略的に使用しているという特徴を持つ。その一つに敬語の使用法を挙げることができる。韓国の大統領演説文に表れた敬語の使用法を分析した代表的な研究として이원복 (2003) があるが、分析対象を2002年2月に発表した演説文に限定しているため、その論考からは一時期の敬語使用の特徴並びに言説生成者と受容者の関係性しか読み解くことができない。よって、本研究は韓国及

び北朝鮮で生成された歴代新年の辞 118 編（韓国 53 編、北朝鮮 65 編）を分析対象として、そこに表れた主体敬語、客体敬語、対者敬語などの使用法に注目しながら先行研究の分析とも対比して研究を行った。

分析の結果、韓国では独裁政権から国民の民主化運動を経て民主主義政権へと統治体制の性格が変容するにつれて各種敬語の使用法が変化し、国家指導者にとって国民は敬意を払う対象に変化してきたことが分かった。その傾向は自称語の選択に端的に表れている。

一方、独裁政権が継続している北朝鮮では統治者の交代を境に主体敬語の使用が増加し、客体敬語の使用が低下するという様相を見せていることが分かった。敬意の対象はほぼ国家指導者であり、韓国とは違って国家指導者と国民の関係性は統治者の交代後により硬直的になったことが分かった。

Beowulf における自然現象表現のイメージスキーマと概念統合

—‘wylm’ を用いたケニングの意味拡張—

高森 理絵(言語文化専攻博士後期課程)

古英語叙事詩 Beowulf には、自然現象で表される、迂言というケニングやヴァリエーションが用いられている。例えば、海や波、雨、氷、雪（霰・雹）、嵐などの水に関わるケニングやヴァリエーションがある。従来の現代英語におけるメタファー研究でも、水や海に関する「自然現象」で「感情」を表す概念メタファーの研究が行われてきた。

Beowulf において、大うねりや湧き立つ波を表す ‘wylm’ に注目し、そのケニングを分析する。海の「波」を表す字義通りの ‘wylm’ について、水の動きをイメージスキーマで表し、それが「海」から「戦場」「葬儀」「身体」「感情」「死」の概念領域で共有されることで、‘wylm’ を用いたケニングの意味拡張を記述する。

‘wylm’ を基礎語に持つケニングが、様々な規定詞と組み合わせられることにより、異なる概念領域との概念統合が生じ、意味が拡張する様子を見ることから、ケニングの基礎語である ‘wylm’ には、UP や OVER のような「移動の方向」を表すイメージスキーマが保持されていることが捉えられる。このことからケニングについて、頭韻などの規則を伴いながらも、現代の概念メタファーと同様、概念領域間の類似性や、共通のイメージスキーマを見て取れる。

今後の研究として、‘wylm’ を用いたケニングが共通のイメージスキーマを保持していたことから、現代英語の自然現象表現についても同様に分析したい。‘a wave of ~’ ‘waves of ~’ ‘tsunami of ~’ のようなメタファーにおいて、「戦場」「葬儀」「身体」「感情」「死」のような概念領域と統合するものがあつた場合、身体基盤だけでなく、古英語叙事詩の中の環境や文化と関わりがあるかどうか明らかにしたい。そして、概念領域間の写像や共通領域のイメージスキーマ、概念統合などの認知的作用と、通時的に定着した概念メタファーとの関係を考察してゆきたい。

英語前置詞の習得に関する一考察

—OVER のイメージスキーマを応用して—

大嶋 ルリ子（言語文化専攻博士後期課程）

英語の前置詞は空間における参与者間の関係を明示する文法形態であり、母語話者はこれによって直感的に二者の位置関係をイメージする。しかし、日本語にはこのような文法形態がないため、例えば、助詞に置き換えただけでは捉えきれない意味を捉えねばならない困難が生じる。前置詞の習得が難しいと考えられる一因がここにあると言える。前置詞の意味・機能が多様であるため、中学校・高等学校の現場においては、前置詞を包括的に教えることに重点が置かれていない現状がある。例えば、「上」を表す *above*、*on*、*over* の理解は曖昧である。しかし、佐野(2008)が指摘するように、前置詞は人の認識の仕方を反映しており、英語学習者が自ら前置詞を使えるようになるには、英語母語話者が暗黙に持っている前置詞選択の方向性や前置詞の振る舞いを教える必要がある。前置詞の多様な振る舞いを包括的に捉えるためには、まず中心的な意味を的確に捉えられる理解の仕方を提示することが望まれる。

数ある前置詞の中で、最も使用状況が複雑なものの一つに *over* がある。静・動的状況で使用されるという *over* の特殊性故に、認知言語学の分野では、中心義についてこれまで様々な議論が展開されてきたが、先行研究の知見は言語習得の観点からは再分析の余地が残されていると考える。

本発表では、言語習得の観点に立ち、*over* の中心義とイメージスキーマの関係性を捉え直し、*over* の学習におけるイメージスキーマの効果的な利用方法を提案する。FROWN Corpus から採取したデータを分析し、中心義は「被覆義」とした。この意義を基にしたイメージスキーマを利用した場合とそうでない場合で、*over* の習得にどのような違いが見られるかテストし考察した。結果から、前置詞の学習において、イメージスキーマは効果的に利用できることが示された。

第4室（A棟3F講義室）

幕末から明治初期における英学（文法範疇・用語）に関する一考察

佐古敏子（言語文化専攻博士後期課程）

我が国の英学史上、初めて幕府に献上された本格的な英文典、渋川敬直訳述、藤井資補訂『英文鑑』1840-41年（天保11-12）上編原辞論(品詞論)の分析を基軸として、幕末期から明治初期に刊行された『諸厄利亜語林大成』、『英吉利文典』（「木の葉文典」）等、諸英文典との関わりの中で「品詞分類にみる文法範疇、術語の変遷」殊に、「分詞」「動名詞」を中心に考察する。

また、注目すべきは上記三文典に代表される英文典は正に蘭学から英学への言語学習の転移を示す証左となる貴重な言語資料と考える。この点で、その脈絡の中で一連の変遷を比較、検討の必要から、和蘭文典『訂正蘭語九品集』を加え、同じく「文法術語の変遷一

覧表」に組み入れ照合の上、比較、検討する。

当該期にあつて、英学がいかにして起こり、英文典がどのように翻訳され英文法研究へ推移していったのか。その一端を探るべく、「文法範疇、術語の変遷」の分析を通し、検討を試みる。さらに、明治初期、本格的な英語学習の事始めにあたり、その教材に影響を及ぼしたであろう英文典の検討も視野に入れ、我が国の英学史上における上記英文典の位置づけの一助としたい。

なお、報告では、別表とした「幕末期、文法範疇・術語の変遷」一覧表 A~C（報告者作成）を基に、以下の点を考察したいと思う。

- ・上記一覧表、各英文典の概要、特徴について考察の上、蘭文典から英文典への全体的な流れを把握する
- ・各文典間にみる異同に着目。ここでは、殊に「participles(分詞)」と「gerunds(動名詞)」を素材として、異同についての照合、検討する
- ・上記の検討結果を踏まえ、その文法範疇、術語の変遷を考察する
- ・最後に一覧表にみる幕末期の英文典が明治初期の英語教材にいかの影響を与えたかを検証する

アメリカ子供医療保険制度の効用性

中島 可帆里（言語社会専攻博士前期課程）

アメリカ医療保険制度については、日本でも多くの研究がされている。しかし、それは成人に対するものが主であり、子供に関する研究は管見の限りされていない。その主な理由は、成人の医療保険制度に比べ、子供の医療保険制度は充実しており、議論の必要性が低いと考えられているからである。実際、成人保険は、未だに国民皆保険の成立には至っていないが、子供の保険制度に関しては約90%の保険加入率をほこっている。これは、一般的に、子供の医療保険制度は「効果的」な制度である、として考えられている理由にもなっている。しかし、この子供のために作られた医療保険は果たして本当に効果的であると言えるのではないだろうか。このたびの発表では、議論されるべき問題が山積みである大人に焦点が当てられている中で、あえて子供に焦点を当てることに一つの意義をみいだしていく。子供の医療保険制度が達成した高い加入率にとらわれず、その内容を細かくみていくと、そこにはたくさん問題が起こっている。これまで見落とされてきた、それらの問題について議論していきたい。そのためにもまずは、何をもって「効果をもつ制度である」と定義づけることができるのか、その定義について考察し、そしてそれが一体誰に取って効果的であるのか、についてみていく。合わせて、各政権下での法案や、議会での攻防、その中でみられる政治的意図を明らかにすることも行う。最後には、この制度が本当に効果的なものであると言えるのか、その答えを明らかにするとともに、どのようにすれば効果を上げるものとするのか、一つの考えを提案する。

劉呐鷗暗殺について

陳麗（言語社会専攻博士後期課程単位取得退学）

1920年代中国上海の文壇に活躍した劉呐鷗（1905-1940）は、近年文学研究の注目を浴びるようになった。台湾生まれて日本の国籍を持ち、日本に留学して文学を愛し、上海に渡って書店を設立し、小説を書いた後に映画業界に転向し、暗殺によって死す。

劉呐鷗の死は、「黄金栄、杜月笙の青紅幫によって打ち殺された。主に賭博場の争いをめぐる経済問題及びならず者との対立が原因で、政治的の問題ではない」という説もあれば、「国民党が映画製作者の中の祖国を反逆者の代表として劉呐鷗を射殺した」という説もある。劉呐鷗の死から半世紀以上の月日が流れたが、劉呐鷗はなぜ、そして誰によって殺されたのかについては未だに謎に包まれて真実は解明されていない。二つ異なる説にどちらに信憑性があるか、二つの説が矛盾をしてないか、また幫派と国民党との間に何らかの関係がないかは疑問である。

今回の発表では、これらの疑問を巡って、現有の資料を踏まえ、1920年代国民党の方針、指揮者である蒋介石の経歴及び活動に留意しながら、旧上海に威力を持つ青幫、洪幫の発展、活動手法、及び国民党との往来に着目し、当時の上海を中心とした社会現象において劉呐鷗の暗殺に必然性がないかを考えたい。

報告はいくつかの視点に沿って進めていきたい。視点その一、旧上海に青洪幫の成立及び発展、その中心人物の国民党との関係。視点その二、国民党における中統と軍統の存在、及び軍統の育て上げた抗日除奸団の活動内容。その三、劉呐鷗が1926年上海は渡ってから1940年暗殺までの行動と当時の社会背景との関連性。その四、劉呐鷗が漢奸と見られた理由及び合理性。